

『説明できるエンゼルケア』 癒しの心を導く エンゼルケアの実践書

著：小林光恵／定価：1,890 円(本体 1,800 円＋税 5%)
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



看護教育においては、死に向かう人のケアとしてエンゼルケアを位置づけ、亡くなられた故人や家族の意向を大切にケアとして教育している。しかし、「綿をつめる、つめない?」など根拠が明確にされないことも多く、混沌としたなかで教育してきた背景がある。エンゼルケアはいかにあるべきか、これから看護師になる学生たちは何を知っておく必要があるのか、本書にてそれを知る機会を得た。

昨年の東日本大震災後のある家族のことである。亡くなった母親のご遺体に対して生前の顔に近い状態にエンゼルメイクをして差し上げ、子どもたちと夫が寂しいなかにもやっと別れの決意ができたという報道を見た。エンゼルケアでは、大切な方と別れ、残された方の心が癒される必要がある。最後の姿をご家族の望む形でお送りしたい。それはケアにあたった看護師たちも同じ気持ちである。では、実際にはどのようにしていったらよいのだろうか。故人を見送るご家族や近親者の心の叫びに耳を傾けるとはどういうことか、看護師自身がもつべきスタンスとは何か、その疑問に答えてくれたのが本書である。

本書ではエンゼルケアにあたる人の心得、ご家族や近親者への配慮の仕方について、胸中を察した声かけ方法を具体的に示し、イメージできるようにしてある。質問形式やイラストを用いて説

明してあるので、とてもわかりやすい。イラストはあまり暗くなくさわやかである。そして、これまで慣例的にやってきたことに関しても、きちんとした根拠を明確に説明してある。例えば、顔にかける白い布・手を組ませるなど、筆者も違和感を感じてきたことであるが、理由がわかるように説明してある。自分のやっていた行為の意味がよくわかった。本書の大切にしていることは、故人を生前と区別しないこと、亡くなった方を生きているときと同様に気遣い、ご家族の気持ちに寄り添うこと、死の印づけは行わないことである。その人らしく家族の望むようにして差し上げ、最後の姿が家族のなかに永遠に残るようにしてあげたい。いつ思い出しても心が癒され納得ゆくものであることが望ましい。エンゼルケアは、故人に関わる人たちのグリーフケアのひとつなのである。

生きているときと同様に接し遺体として区別しないこと。これまでの慣わしに縛られていたものを一度立ち止まり選択してみる。本書はそれを教えてくれた。これから人の死に遭遇する看護学生やエンゼルケアにあたる人々が本書を一読することで、ご家族の気持ちに寄り添い、心安らかにケアにあたることができると考える。誰もが死に至る。自分の愛する人の最後の姿は、その人らしく残された人の望む姿でお見送りしてあげたい。本書はそれを身近に教えてくれた一冊である。